コラム アイトマコト

# EYE & MAKOTO

谷口誠［日本経済新聞社］の

## 視点、意見、ラグビー愛

## 「マスターズ」が開く扉。

遠くからでも、二十年の時を経ても、すぐに分かる。秋雨に打たれた芝の上に、見覚えのある姿があった。

10月9日、花園ラグビー場の第1グラウンド。高校OBの大会「マスターズ花園」が開かれていた。

第1回の大会を、報道のエリアではなく、客席から見守った。滋賀県立膳所高校ラグビー班（同高は部と呼ばない）の同期2人が出場していたからだ。

大会の規定上、最も若手の年代とはいえ、40代も半ばに入っている。2人とも、髪に白いものが目立つ。大会前の練習では仲良く肉離れを負った。速く走れるはずもない。

でも。防御ラインでの立ち姿、ボールを追って走るフォーム。一緒に花園出場を目指してかなわなかった、あの頃のままだった。

相手は秋田工業。トップリーグの経験者も混じる名門は大柄な選手が多い。体格差のある相手に挑むところまで高校時代と同じだった。

キック力もある秋田工に対し、ほとんど自陣での試合を強いられた。0－34の完敗。その中で奮闘したのが、HOに入った同期だった。10分間の出場でタックルを5度も敢行。どれもが太ももの高さだった。

卒業後、ラグビーの試合は初めてという。26年ぶりなのに、往時のハードタックラーの面影はあった。大きい相手を止めるには低さと速さ。チームの伝統は染みついていた。

出場したもう1人の同期は、ラグビースクールでコーチを務める。教え子に、別の同級生の子供2人がいる。雨の中、客席の最前列まで降りて「コーチ」にエールを贈っていた。

スポーツで生まれた縁が世代を超え、引き継がれる。いい光景だった。

人の輪はさらに広がる。

マスター・オブ・マスターズ！

キックオフの直前、アナウンスがあった。大会最年長の91歳。膳所高ラグビー班の第1期生、貴田哲弘さんである。黄金色のパンツに9番を背負い、最初の2分間、出場した。

スクラムからのパスは僅かに短く、SOのノックオンにつながった。しかし、長年、心に刻んでいただろう哲学がにじむ場面もあった。

自陣でラックができる。球を出そうとした貴田さんは味方と接触、転倒した。心配する周囲をよそに、すっと立つ。何事もなかったようにプレーを続けた。倒されたら、すぐに立ち上がる。この競技で大事なことを何十年も繰り返してきたのだろう。

生まれたての大会は、日本のラグビーに足りないものを付け加えてくれる気がする。

少子化に趣味嗜好の多様化…。スポーツに逆風が吹く中、国内の競技団体は裾野の拡大に苦戦する。数少ない有望分野が中高年層である。

この世代にもともと人気のゴルフに加え、近年はランニングなどの愛好者が増えている。団体球技にも恩恵は及ぶ。サッカーの場合、40歳以上の「シニア」のカテゴリーに登録する選手は昨年度で約4万2000人。2000年度の9倍に膨らんだ。

ラグビーにはこの波がまだ、届いていない。コンタクトプレーのある競技はケガをしやすい。年を重ね、練習の時間が足りないとなおさらのこと。競技をしていた人ほど二の足を踏むのかもしれない。

しかし、中高年層のラグビーは日本が元祖である。1948年、世界初の40歳以上のチームとして設立されたのが「不惑倶楽部」。今、同じ理念を持つチームや大会は各国に広がる。年齢でパンツを色分けし、タックルなどを制限するルールも日本で生まれ、世界標準となった。

年配者のスポーツは日本の得意種目でもある。陸上などでは年代別に世界記録が存在する。年が上がるほど、日本人の記録保持者は増える。

ただ、この年代にとっては、記録や勝ち負け以外のものの方が、はるかに大きいのではないか。

母校のアフターマッチファンクション。秋田工から地酒やクッキーが贈られた。膳所はアルコールに加え、湖魚の佃煮や、近江牛のしぐれ煮。地元の名産品を交換し、酒の肴にする。高校、大学と違う「マスターズ」の味わいがあった。

今大会は抽選などで選ばれた18校が参加した。今後は規模の拡大も検討されている。野球の「マスターズ甲子園」は出場チームが700を超えた。キャッチボールだけの参加もできる。ラグビーの新大会も、多くの人に喜びを提供できる舞台に成長する可能性がある。

マスターズ・ラグビー・リーグ。ニュージーランド発祥の13人制の国際大会である。スローガンがふるっている。

「年を取ってもプレーをやめない。プレーをやめるから年を取るのだ」

「プレー」は、いくつになっても必要なもの。遊ぶことが体に、心に、刺激を与え、生活に潤いをもたらす。高齢の人がますます増える日本で、楕円球を追う人の輪が広がる意義は小さくない。

マスターズ花園が終わった翌日。タックル連発のHOから同期にメッセージが届いた。

「来年に向けて各自トレーニング!!」

今回は26年ぶりの試合だった。次の機会はすぐにやってきそうだ。

マスターズ、秋田工×膳所の試合後の一枚。プレーはいくつになっても楽しく、必要

PROFILE◎たにぐち・まこと／日本経済新聞社編集局運動グループ、スポーツビジネスエディター（記者）。1978年12月31日生まれ。滋賀県出身。膳所高→京大。大学卒業後、日本経済新聞社へ。東京都庁や警察、東日本大震災などの取材を経て現部署。早稲田大学大学院スポーツ科学研究科で社会人修士課程修了。ラグビーワールドカップは2015年大会など3大会を取材。運動グループではラグビー以外に野球、サッカー、バスケットボールなどの現場を知る。高校、大学でラグビーに打ち込む。ポジションはFL。